

内戦後の武装解除に貢献した日本人

在ガーナ日本国大使館
(シエラレオネ兼轄)

シエラレオネは、1961年に英国から独立しますが、1991年の反政府軍による武装蜂起により内戦に突入します。シエラレオネ内戦は、紛争ダイヤモンドを主な資金源とする様々な暴力行為で民間人12万人余りが死亡し、数千人が手足を切り落とされるなど、その残虐性で知られていますが、内戦終結後の武装解除で大きな役割を果たした日本人がいます。

それが、伊勢崎賢治さん（現東京外国語大学教授）と瀬谷ルミ子さん（現日本紛争要望センター理事長）です。伊勢崎さんは国際連合シエラレオネ派遣団（UNAMSIL）武装解除・動員解除・社会復帰（DDR）部長として、また瀬谷さんはUNAMSILのDDR担当官として、共に武装解除、除隊兵士の社会復帰プログラムに従事しました。少年兵も多数活動していたシエラレオネ内戦の武装解除は交渉、説得も一筋縄ではいかず、お二人とも相当ご苦労されたようです。

ただ、こうした努力が実って、シエラレオネでは内戦終結後、15年以上にわたり平和が続いています。安定した民主主義体制への移行、成長経済の発展、そしてさまざまなレベルでの社会的な団結を可能にした、平和構築から紛争後の復興に至る包括的なプロセスを経験したモデル国として知られるようになっており、世界平和度指数の2018年版では、モーリシャス、ボツワナに次いでアフリカでは3番目に平和な国と評価されるまでになっています。